

1-1 『2011年度 学生センター白書』に寄せて

学生センター長 宮崎伸光

本書は、2011年度における学生センターの活動をとりまとめた報告書です。学生センターは、その前身である学生部の時代から、学生生活全般にわたる支援を任務としていますので、本書の内容はきわめて多方面にわたっています。

2011年度の学生生活は、前年度末の3月11日に発生した東日本大震災によって市ヶ谷校地における授業開始が1か月遅れ、各種の新歓行事等も中止ないし大幅な企画変更を余儀なくされるなど、大打撃を受けて始まりました。15パーセントに設定された節電目標を達成するために、空調は抑えられ、エレベーターやエスカレーターも部分的に止められました。とにかく暑い季節はたいへんでした。長く続く断続的余震に対する備えも構えも必要で、施設の使用制限など学生の諸活動に及ぼした影響も甚大でした。

一方、被災地支援に何らかの貢献をしたいという学生の志が多く寄せられたことも特筆に値するできごとでした。ボランティアセンターでは、そうした思いを受け止めつつ、気持ちばかりが先立つ行動により、現地にかえって迷惑をかけたり、思わぬ事故に巻き込まれたりしないように、注意を呼びかけることからまず始め、現地に行かなくともできることを企画しました。さらに並行して、学生相談室とも連携をはかり、心と体と十分な装備等を整えうえて現地において汗を流す企画を進め、実施しました。加えて、学生が個人ないしグループで参加する種々の被災地支援活動についても、側面支援を重ねてきました。

秋の大学祭は、余震の心配（実際に、期間中にも地震は

発生しました）とは裏腹に、かつてない規模の来場者を集めました。そして、一面においては学生の日頃のサークル等における活動の成果が披露されるなど、大いに活気があふれました。しかし、たいへん残念なことながら、また別の一面においては、意識不明の泥酔者が放置されるなど、集団飲酒の果てに生命の危機にまで及ぶ事態が複数件発生しました。

日常においては、前年度に多くの学生・教職員の参加と多大な時間をかけて制定された市ヶ谷校地における飲酒ルールが順調に運用され、学内における無謀な集団飲酒はすっかり見られなくなっただけに、大学祭における集団飲酒に伴う乱暴な騒ぎは、関係者に大きな衝撃を与えました。そして、大学祭を主催してきた学友会において大学祭のあり方について、抜本的な再検討が始められることになりました。

また、正課外教育の一端として始められました本学のピア・サポート関連事業ですが、文部科学省の補助金から離れ自立した本年度においてもその勢いは衰えることなく、むしろ正課、非正課の垣根を越えて「学生による学生の支援」が普通のこととして、特定の事業を超えて根付きつつあり、今後も発展する方向にあります。

経済社会の状況など学生生活を巡る環境にはなお厳しいものがありますが、学生センターの教職員一同は、学生生活支援にさらにいっそう注力して参ります。